

個人の知識やノウハウを共有しよう



## SECI(セキ)モデル



新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、テレワークの導入を進める企業が増えるなど、働き方が急速に変化しています。テレワークは業務効率が上がるとされる一方で、コミュニケーション面での課題も多く見られています。そのような中で、社員が業務中に得た知識等を共有し活用させるための“SECIモデル”が再び注目されているようです。

### ≫SECIモデルとは

SECI(セキ)モデルとは、経営学者の野中郁次郎氏(一橋大学名誉教授)が提唱した「ナレッジ・マネジメント」の基礎理論です。ナレッジ・マネジメントとは、社員が個人的に持っている知識を全社的に共有することで、企業の力を高める手法です。

SECIモデルでは、組織に蓄積されている知識を「暗黙知」と「形式知」の2種類に分類しています。野中氏は、組織の成長のためには、暗黙知を形式知に変換することが重要だと唱えています。

**暗黙知** : 言葉にしづらい／まだされていない知識

**形式知** : 言葉や図で説明できる／すでにされている知識

例えば、長年の経験で培ったノウハウが暗黙知、マニュアルに書いてあることが形式知、といった具合です。そしてSECIモデルでは、暗黙知を形式知に変換することで、個人のノウハウが全社的に共有されるようになります。

### ≫SECIモデル活用の効果

#### 業務の効率化を促す

例えば、資料作りに長けている社員が手法を公開し、研修プログラムに反映させれば、全社員の資料作成レベル向上など業務の効率化に繋がります。

#### 業務の属人化を防ぐ

特定の人物が存在しないと成り立たない業務は、円滑な組織運用の妨げになりがちです。SECIモデルを活用することで、属人化されている部分がクリアとなり、社員間での共有が可能となります。

#### 営業力・技術力の強化

組織風土改革によって風通しを良くし、普段は交流がない部署間で知識共有を行えば、企業成長に繋がる新たなアイデアやプランも生まれやすくなります。



## SECIモデルにおける4つのプロセス

SECIモデルでは、知識の創造プロセスを4つに分け、サイクルとなって循環していきます。

### 共同化 (Socialization)

個々人が保有している暗黙知を、複数人での体験を通じて共有します。つまり、一緒に作業等することで、見よう見まねで覚えるといったことです。

### 表出化 (Externalization)

共有した暗黙知を文章や図によって形式化し、概念を創造します。例えば、経験によって得たノウハウをマニュアルに落とし込むことなどです。

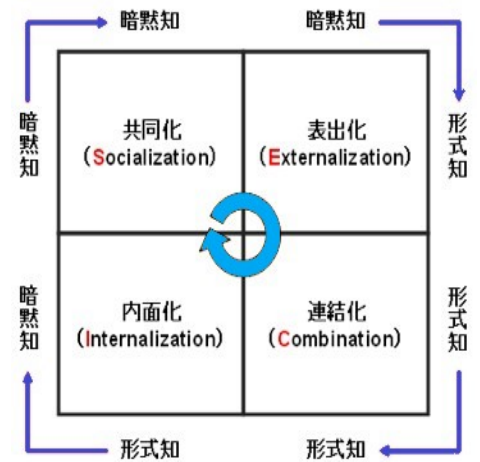
### 連結化 (Combination)

共同化によって得た暗黙知を表出化によって変換された形式知に、既存の形式知を組み合わせ、体系化します。

### 内面化 (Internalization)

体系化した形式知を個々人が体験し、暗黙知として内面に取り入れます。

実際に体験し実践することで、新たな暗黙知が生まれ、いずれは共同化によって他の人に伝わることになります。



これら4つのプロセスを繰り返すことで、社内で情報を共有し、新たな知識を生み出すことができます。

## SECIモデルにおける「場」とは

SECIモデルにおける「共同化」「表出化」「連結化」「内面化」を実践するには、それぞれのプロセスに応じた「場」が必要とされ、知識創造のプロセスを行う「場」の創出が重要だといわれています。

### 共同化の場「創発場」

経験や思いなどの暗黙知を共有する場で、人から人へノウハウの伝達を行います。先輩の仕事を見ながらノウハウを得たり、雑談の中で他者の経験を伝えたりする場を通して、個人の暗黙知が他人に共有されていきます。



### 表出化の場「対話場」

対話を通じて、暗黙知を他者が理解できるように言語化したりマニュアル化したりする場です。対話場の例として、プレゼンテーションやミーティングがあげられます。

### 連結化の場「システム場」

連結化は複数の形式知が結合するプロセスです。そのため、各従業員が形式知を持ち寄れる場が必要とされます。ビジネスチャットツールで作成されたグループも「システム場」です。複数のメンバーが形式知を投稿していくことで、形式知が体系化されていきます。

### 内面化の場「実践場」

内面化では、獲得した形式知を仕事の現場で実践し、形式知が個人の暗黙知へと変わっていく場です。これを行う実践場は、普段の仕事の場を指します。

知識の創造や体系化は、業務効率化に留まらず、企業競争力の強化や社内の風土改革にも繋がる経営手法のようです。SECIモデルの流れを実現することで、個人がレベルアップできるだけでなく、組織全体の成長にも繋がりますので、SECIモデルを構成する4つのプロセスのための「場」を意識的に作ることから始めてみるのもいいかもしれませんね。